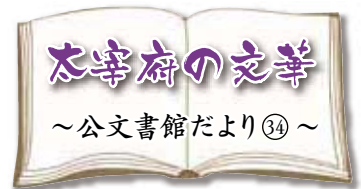


在村医の診療記録

太宰府の医家中川家は、初代中川養節^{せつ}が17世紀半ばに太宰府で開業し代々内科を専門としてきた在村医の家系です。4代目の昌澤^{しやうたく}は福岡藩から天満宮社家中の種痘^{しゆとう}医に命じられるなど幕末維新时期における太宰府の地域医療に貢献した人物で、彼は日常の診療活動の一部を「医窓筆談」（中川家文書）という日記にまとめて残しています。江戸時代^{しやう}の在村医による診療記録は全国的に見ても数が少なく、当時の医療内容を知るうえで貴重な史料です。



よるもので、昌澤は京都へ遊学してこの医术を身につけました。患者を診察し病因を考え投薬し経過をよく観察して効果が見られなかったら別の薬を処方する、という医术の様子を詳細に記録し、臨床と実践を重んじる古医方の体をよく示しています。疱瘡に罹患した男児の治療を行った時は、全身に広がった発疹が膿み始めた6日目から膿が出る11日目までは膿疱の色と形を毎日観察し、食欲、排泄、全身の状態なども踏まえて投薬しており、当時の診療の様子が生々しく伝わってきます。

「医窓筆談」では、死亡例が1件ある他は昌澤の治療によって回復しています。しかし、重症の患者ばかりで1回の投薬では平癒せず処方を変えて何回も投薬をしているので、この記録は難治の症例だけを集めて後の診療の参考にしようとしたのではないかと考えられます。筆致にも書き継いだ形跡が見られず、後年編纂の可能性が高いです。患者の臨終に立ち合った昌澤が「私の誤鑑である、なぜ病因をつきとめることができなかつたのか」と悔恨し自らを戒める言葉を記していることから、医療にかける彼の思いが読み取れます。

「医窓筆談」は、嘉永元（1848）年から安政2（1855）年までの11件分の記録で、昌澤が居住する宰府村の患者が3名、御笠郡内が2名、郡外が2名、不明が4名です。

江戸時代の医師も現在と同じで、腕が良ければ多くの患者に頼られ遠方まで診療に出かけることもしばしばありました。また、記録には前医の「治療困難」によって診療を引き継いだ事例も見られ、このことから昌澤の医師としての能力の高さと信頼の厚さがうかがえます。患者層も幅広く、疱瘡（天然痘）の小児や「血の道の病」の婦人、傷寒（高熱を伴う疾患）の僧侶などがおり、延寿王院^{しんじゆ}信全^{しんぜん}の名前もあります。診療の内容は古医方（漢方医学の一派）に